

平和って何だろう

第三小学校 六年

後藤衣織

平和って何だろう？
けんかをしないこと？

友達と笑って遊べる

家族と仲良く過ごす

そんな時間があたりまえに感じる

好きなことをがまんして

こわい思いをしている人もいる

世界のあらゆるところで

学校も選べなくて

服も買えなくて

心がさみしく生きている

そんな子供もいるんだってさ

「わたしには何ができるのかな？」

そう思う時もあるけれど

小さな優しさはきつと

誰かの心に届くはずだ

「ありがとう」や「ごめんね」

「大丈夫？」と声をかける

それだけで心があたたかくなる気がする

平和はもらうものではなく

誰かにあたえることもできるんだ

勇気の種をまこう

優しさの種をまこう

言葉や笑顔を増やそう

私たちの手の中にある平和の種

未来に大きな花を咲かせるために

生きていこう

ぼくが考える平和

第三小学校 六年

庄司文留

今年、戦争が終わって八十年がたちます。八十年前、日本は約四年間にわたって続いた太平洋戦争を終えました。八十年という年月はと

ても長いように感じますが、ぼくにとっておじいちゃんやおばあちゃんがまだ生まれていなかったころの出来事です。しかし、そのえいきょうは今の時代にも続いていて決して遠い過去の話ではないのだと思います。もし戦争が続いていたら今のように学校へ通ったり、友達と遊んだりすることができなかったと思うと、平和であることの大切さを考えさせられます。戦争は何も生まず、失う物ばかりです。建物や道、町がこわれるだけでなく、人の命が失われます。そして命を落としてしまった人にもぼくたちと同じように、お父さんやお母さん、兄弟やおじいちゃんおばあちゃん、友達がいました。きっと家族や大切な人がいなくなってしまう、残された人たちはとても悲しんだと思います。自分の家族や友達が戦争で亡くなってしまったらと想像すると、とても悲しくなります。

しかも悲しんでいたのは日本人々だけではありません。戦っていた相手の国の人たちも同じように大切な人を失い、なみだを流していたのです。国がちがっても、人はみんなだれかを大切に思い、幸せな暮らしをしたいと思う気持ちは同じです。だからこそ戦争はどんな国にとっても悲しみしか生まないのです。今も世界のどこかでは争いが起きています。本当なら学校へ行って勉強をしたり、友達と遊んだりしたいはずなのに、安心して暮らせません。そう考えると、今あるぼくの生活がどれほど幸せか強く感じます。

ぼくは、戦争が終わって八十年たった今の生活は、多くの人の努力や願いによって守られていると思います。戦争で亡くなった人たちがその家族や友達など悲しみをかかえた人たちは、二度と同じことが起

きないように、という思いを強く持ったはずですが、その思いが積み重なり、今の日本の平和につながっているのだと思います。ぼくが毎日自分の家で安心してねむり、朝をむかえられるのは、その人たちのおかげなのです。

これから先も平和な日々を守るためには、ぼくたち一人ひとりが平和を大事に思うことが大切だと思います。大きなことはできなくても、身近なことからはじめられることがあると思います。たとえば、だれかとけんかをしたときに相手の気持ちを考えて仲直りすることも、平和への第一歩です。家族や友達を大切にし、思いやりの心を持つことが、平和につながります。戦争を体験した人の話を聞ける機会は、年々少なくなってきました。だから、今のうちに学んでおきたいです。そして自分の世代が大人になったときに、次の世代に伝えていくことが、平和を守る大切な役割になると思います。

今年、戦争が終わって八十年という節目をむかえました。ぼくはこの年に平和について学べたことを忘れず、毎日の暮らしに感謝しながら生きていきたいです。そしてこれからも戦争のない平和な世の中が続いていくように自分でできることを考え、行動していきたいです。

僕の戦争についてのイメージ

第四小学校 六年

保田 悠 貴

僕は夏休みに、広島に行ってきた。

それまでの僕のなかでの戦争というものは、「ロシアとウクライナで起こっている、無だんな人々の殺し合い。日本は平和主義をかかげて、二度と起きないもの。」原爆については「広島と長崎に第二次世界大戦にて落とされた爆弾。い力が高い。」で終わりだった。それまで戦争について知る機会がなかったし、知ろうとも思わなかったからだ。しかし、広島に行き、戦争や原爆についてたくさん知ることになった。広島についてまず、平和記念公園に行った。ここは、原爆によって焼け野原になった土地が公園になっているが、これほどの焼け野原になってしまったことにはおどろいた。

次に、平和記念資料館に行って、原爆についての写真や物を見た。原爆のしよげきからできたきのこ雲や、爆心地から一キロメートル以上はなれていてもボロボロになった服などを見て、原爆のい力におどろいた。他の写真なども見てきたが、それで分かったのは、原爆が落とされる前の広島は栄えており、建物もたくさん建っていたということだ。

しかし、原爆が落とされるとあたり一面焼け野原になり、黒色の雨

が降り注ぎ、大勢の人が死んで、生き残った人の人生もグチャグチャになってしまった。原爆は人の命だけでなく、いろいろなものをうばっていった。僕は原爆一発で、これだけのものをうばうのかと思った。

そもそも、原爆に限らず、なぜ、恐ろしい兵器を作ってしまったのか。戦争に勝つため、しかし、戦争が終わっても、亡くなった人は帰ってこない。なぜ、こんな残こくで無益なことを何回もくり返すのか。当時の政府は国民の命は他人事だと思っているのかと思った。

最初に書いた戦争と原爆のイメージは、広島に行つて大きく変わった。原爆については「人々の命や人生、建物など、一発で多くのものをうばう恐ろしい核兵器。」で、戦争については「原爆のような恐ろしい兵器を生む人々の無だんな殺し合い。」になった。

広島に行つたことは、このような恐ろしい戦争について考えるきっかけになった。そして、僕の戦争などのイメージを大きく変えることとなった。さらに、その戦争がない平和がどれだけ大切か実感することができた。これからも、このような平和が続くことを願っている。そして、自分に何ができるかを考え続けたい。

伝える使命

第五小学校 四年

田村 柚樹

今、私たちが幸せにくらしていられるのは、当たり前ではありません。家があって、食べ物もあって、安心してねむれることに日々感謝して生活したいです。

今年が日本が終戦をむかえてから八十年、そして、広島と長崎に原子爆弾が落とされたのも今から八十年前のことです。

私は去年の夏、長崎の原爆資料館に行きました。

建物に入ると、カラフルな千羽づるが見えました。一羽一羽のつるから、平和を願う気持ちが伝わりました。私も、世界が平和になってほしいという気持ちがさらに強くなりました。

そして、展示されている場所まで行きました。私が最初に見たのは、午前十一時二分で止まっているこわれた時計です。

こわれている時計が、十一時二分に起きたことを伝えているような気がしました。

奥へ進んでいくと、原爆のひ害がすぐ分かるような、写真がありました。人が人の形ではなくなっていて、見ているだけでもつらくなる写真でした。私は目を閉じたくなかったけれど知っておくことも大切だと思いました。

原爆資料館には他にも、とけてしまっているお金やガラスのびん、焼けてしまっている服など原子爆弾のひ害が分かる物が展示されたり、核兵器を持っている国の数など、様々な資料が展示されていました。

戦後八十年が過ぎ、戦争を経験した人が少なくなっています。私は戦争を経験していませんが、長崎の原爆資料館へ行き、この長崎を最後のひばく地にするために、私たちにも、外国の人や次の世代の人に伝える使命があると感じました。

私のそう祖父母が、どのように戦争の時代を生きぬいてきたのか、夏休みに祖母から話を聞きました。

私のそう祖父は原爆が落とされる前、広島で働いていました。八月六日は、朝ねぼうして、電車に乗りおくれました。そう祖父が住んでいたのは、広島市から少しはなれている竹原で、原爆にあいませんでした。

ですが、原爆が落とされた数日後に、ひ害がひどかった場所に行つたそうです。そこにはまだ放射能がのこっていて、そう祖父は、放射線をあびてしまいましたが、幸いそう祖父には症状が出ませんでした。

平和な世界は、核兵器のない、戦争をしない世界であるとともに、世界みんなが、助け合ったり安心してくらせるように努力したり、差別されずに、幸せにくらすことだと思います。

未来へのバトン

第五小学校 五年

勝 又 諒 大

『人はなぜ戦争をするのか？』国の領地を広げたいから？偉い人がアピールをしたいから？国民は戦争をしたくないはずです。国の偉い人のせいで戦争になるのはおかしいです。

僕は戦後八十年のこの夏休みに戦争について学びたいと思い、テレビの特集や本、そして家族へ話を聞くなどしてみました。

太平洋戦争中、僕の住む沼津も昭和二十年七月に空襲があり、都市面積の約九十%が破壊されたそうです。沼津は海軍の軍需工場があったため標的になりました。写真を見ましたが、多数の建物が破壊されて、なんて残酷だと思いました。僕のそう祖父家族もこの空襲の際、沼津に住んでいました。母がそう祖母に聞いた話では、四才の僕の祖父と高祖母をそう祖母が両手で引き、赤ちゃんを背負い数えきれない焼夷弾が降る中、必死で逃げる最中、近くの人に焼夷弾が落ちてくる所を見てしまったそうです。僕は想像をしただけでも恐怖で体が震えました。その時そう祖母が必死で逃げて祖父は助かり、母が生まれ僕がここに生きています。僕は命の尊さを真剣に考え、大切に生きなければと思いました。

戦時中、僕のそう祖父は横須賀・霞ヶ浦の兵学校、そして沼津海軍

工作学校で地理・歴史の先生でした。そう祖父は自分の生徒が飛行機で戦地へ飛び立つ日、帰って来られないのではと思い、悔しさや悲しみで胸が痛み、天皇陛下から賜った菊の紋章入りの葉巻を兵隊さんにあげたと母に話してくれたそうです。この話を聞き、僕が生まれた奇跡とは反対にお国のためにまだ若い兵隊さんの命を落とさなければならなかった戦争の異常さが、僕には全く理解できません。当時は国に命を捧げる事が名誉だったと本で知り、僕は今の時代に生まれて良かったと思いました。でも同時に戦争に命をうばわれた方々がいた事を決して忘れてはいけない、その方々の想いが今の日本の平和につながっているのだと僕は思います。

戦争について母と話すことが増えました。そう祖父がまだ小学生だった母に話した事を教えてくれました。『教師であつたけれど、あんな大きな飛行機や戦艦をたくさん作れる国に勝ると段々思わなくなつた。でも国の命令で生徒を送り出さなきゃいけない辛さは言葉で言い表せない。こんな事を教えるために教師になつたのではない。だから未来で戦争を起こさないために、いつか子供ができたらおじいちゃんの話伝えてね。』僕はそれを聞いて涙があふれてきてしまいました。

戦後八十年経って日本は美しい国になりましたが、原爆ドームを始めとした戦争の跡は残っています。沼津も防空壕や砲台の跡地、慰霊碑等があります。そのような戦争の足跡を勉強に取り入れる事で戦争を忘れないのではないかと僕は思います。

僕達の未来はまだ続きます。こうして夏休みの最中も世界では戦争で辛い思いをしている人々がたくさんいるのです。その事を決し

て忘れず、毎日を大切に過ごしていききたいです。そしてそう祖父母や
祖父母、両親が繋いでくれた僕の命を大事に未来へとバトンタッチし
ていきたいです。

兵器と平和と核と

第五小学校 五年

杉 浦 朔 人

みなさんは、「平和」の具体的な意味を知っていますか。

「平和」は、広辞苑によると、「戦争が無く、世が安穏であること」と
あります。安穏とは、安らかにおだやかなことや、無事という意味が
あります。

つまり、一 戦争が無い、二 安らかでおだやか、三 無事 の、
三つの条件で、「平和」が成立するということです。

ここで、核について考えましょう。

今回は、核弾頭ミサイルを例に考えます。

核兵器の多くは、海に隠されています。主に潜水艦に積まれており、
他国には、どこにあるか分からない状態です。そのため、攻撃をして、
地上の軍事施設などを全て破壊しても、近海から核弾頭ミサイルが飛
んでくるのです。その核兵器の圧力で、他国はうかつに手を出すこと
はできません。これにより、均衡が保たれています。そこで、この状

態で、さらに相手国も核兵器を持つているとき、これを、「相互確証破
壊」といいます。つまり、極端に言えば、核兵器が世界平和に一役買っ
ているというわけで、ぼくは、核兵器よりも、「悪」の存在があると思
えます。それが、人間の、欲と恐怖です。どちらも人の感情を形作る
ものです。また、欲があったからこそ、人はここまで発展しました。
やはり、人と戦争は、どう切ろうとも切れない関係なのです。でも、
人が戦争につながるような感情を抱かなくなればなくせるかもしれま
せん。それには、思想を根本から変える必要がありますが、憲法では
他人の思想に干渉するとなっているので、やはり無理です。しかし、
世界ならばできるかもしれません。世界中の人々に、「戦争＝悪」とい
う考えが広まれば、自然と指導者は戦争に反対する人になり、戦争は
へります。ですが、もう一つ平和を乱すものがあります。「紛争」です。
これは、全て公平にすれば解決ですが、宗教などの問題でむずかしい
と思います。他国が間に入ればいいのですが、どこもそんな役買って
出ません。ならば、ここから何十年先、日本、世界が平和であるため
に、「戦争反対」を掲げる日本は、どうすればいいのか、考え続けなけ
ればいけないと思います。そして、ぼくも、平和について、考え続け
たいと思います。

平和を願って

片浜小学校 五年

植松 紗菜

ひいおばあちゃんから聞いたお話です。戦争中は食べ物が少ない、

お米はないのでさつまいもを食べてくらしていたそうです。また、農家の人達からさつまいもをもらうために、着物や洋服などと、交かんしてもらっていたそうです。私のひいおじいちゃんは、太平洋戦争中に赤紙をもらい、戦争に行ったそうです。ひいおじいちゃんは、無事に帰ってこられたようですが、ひいおじいちゃんの戦友や、友達は命を落としてしまったそうです。その話を聞いて私は、戦争がない時代に生まれて、元気に育って幸せだなと思いました。だって今は、ご飯だっておなかいっぱい食べられます。甘い物やスイーツだって食べられる時代です。みなさんはこれがふつうのようにくらしているかもしれません。戦争中はそんな事を考えられない生活です。

今の日本は、戦争をしていません。みんな平和にくらせています。

前にニュースで八月六日に広島原爆投下から八十年をむかえた事を知りました。私は、広島原爆についてはあまり知りません。でもニュースを見ているとたくさんの方が命を落とし、それを大ぜいの方がお供えをしている様子でした。お供えをする理由は、広島原爆があった事をわすれないように、平和を願う式典という事を知りました。この記

念式典は、広島の人々だけではなく世界各国の人々が集まり世界中の平和を願い、また広島原爆投下の事をわすれずに、語りついでいく事を願っているのだと思います。

私は、戦争の話や広島原爆投下の話を聞いて戦争がなくなってほしいと思うと同時に、本当の平和とは何なのかという事がぎ間に思えました。私が思う本当の平和とは世界中の人々が豊かにくらせて、安心して笑いあえる事が平和と言えらると思います。

今この世界は平和と言えるのでしょうか。私は、平和だとは思えません。多くの国が争いをして、大ぜいの命がなくなってしまうのが豊かと言えるのでしょうか。戦争がおきると、大ぜいの命がなくなってしまう。命は一人に一つしかありません。戦争中に爆弾が落ちてきたとしましょう。その場にいた人達はまきぞえをくらって命を簡単に落としてしまいます。そんな世界で安心して笑いあえるのでしょうか。一人だけが平和でもそれは本当の平和とは言えません。世界中の人々のだれもが豊かにくらせて、安心して笑いあえる事で本当の平和に近づけると私は思います。

広島を訪れて

金岡小学校 六年

杉山 苺佳

この夏、私は家族と一緒に広島市の平和記念資料館に行きました。日本が昔、戦争をしていたことや、広島と長崎に原爆が落とされたことは知っていたけれど、くわしいことはあまり知りませんでした。ニュースなどで「戦争はよくない」と聞いたことはあっても、それがどういうことなのか、ちゃんと分かっていたのだと思います。

資料館の中に入ったとたん、私は言葉を失いました。そこには、焼けた洋服や、自転車、こげたお弁当箱などが、静かにかざられています。原爆が落とされた時に、人々がどんなつらい目にあっただかが、強く伝わってきました。

私は、原爆でたくさんの方が亡くなったことは知っていました。でも、それが世界で日本だけだったと聞いて、おどろきました。なぜそんなことが起きたのか、ふつうの生活をしていた人たちがどうして巻きこまれたのか、考えれば考えるほど、やるせない気持ちになりました。

特に心に残ったのは、私と同じくらいの年の女の子の話です。学校に行って、友達と遊んで、笑っていたふつうの日々が、原爆のたった一しゅんでうばわれてしまいました。その女の子は、後遺症とたたか

いながらも、あきらめずに生きようとしていました。その強さに私は胸を打たれました。

原爆が落ちたその時、命をうばわれた人がものすごくたくさんいます。でも、それだけではありません。生き残った人たちも、体や心に傷を負って、今もお苦しんでいる人がいることを初めて知りました。資料館の外に出て、原爆ドームのぼろぼろにくずれた建物を見て、本当にあったことなのだと体がふるえ、私は涙が出ました。こわい、悲しい、くやしい、そんな気持ちが一緒になって、うまく言えない思いにになりました。でも一番強く思ったのは、

「もう、こんなことは二度とあってはいけません。」
ということでした。

今の私の生活が、とても幸せで当たり前なものではないということに気づきました。

今も、世界には戦争をしている国があり、核兵器も多くの国が持っているのを知りました。私たちの世界はまだまだ「平和」とは言えません。原子力という力を、人をきずつけるためではなく、みんなの生活のために使ってほしいです。

私は国を動かすことはできないけど、周りの人に優しくすること、相手の気持ちを考えることはできます。そういう気持ちが少しずつ広がっていけば、いつか世界中が平和になる日が来るかもしれません。

私はこれからも、平和について考え続け、自分にできることをしていききたいです。

平和について思うこと

愛鷹小学校 五年

小野 碧 空

「平和」とは、みんなが幸せにくらしていることだと思います。

昭和二十年八月六日に広島に、九日に長崎に原子爆くだんが投下され、年末までに広島でおよそ十四万人、長崎でおよそ七万人がなくなりました。戦争が終わってからも、ほうしゃ線によって多くの人々が苦しめられたそうです。

今年には戦後八十年という事で、テレビで色々なイベントや番組など見ました。

「ほたるの墓」では、ばくだんによって、人が焼けて黒こげになり、やけどしてほうたいでぐるぐるまきになっている姿を見て、とてもかわいそうでたまりませんでした。家もなく、食べるものもなく、病気になるって死んでしまったり、戦争はみんなを不幸にすると思います。

外国は今も戦争が起きていて多くの人がぎせいになっています。子どもたちは、学校に行けず、はたらかなくてはいけない子どももいるそうです。水もかんりされていけないのでかんせんしょうにかかったり、栄養しつちょうでなくなったりする事もあるので、とてもこわいなと思います。

今、ロシアとウクライナの戦争の事についてニュースでやっています。ロシアは話し合いにおうじず、約束をしても守らなかったことや関係のない人が多くぎせいになっているのを見るととても悲しく思います。国と国、人と人が自分の欲だけで戦争を起こすのではなくその国の代表者がおたがい話し合って、かいつできるようなればいいと思います。

戦争はずつと遠くの国のことで自分には関係ないと思っていました。日本でもいつどんなことが起きるか分かりません。少しこわいなと思っています。

世界から、戦争で使うぶ器がなくなれば、戦争はおきないと思います。

世界中の人が、おたがい思いやりの心を持って仲良く笑顔でくらしたいけるようになったら幸せだと思います。

沼津大空襲を知って

愛鷹小学校 六年

杉 本 温 人

僕は、この夏休みに子ども向けイベント「平和を考える戦争史跡めぐり」に参加しました。市内に残る戦争史跡を、学芸員と一緒に四か所まわりました。そこで、僕は、沼津市が空襲されたことを知りまし

た。

沼津市が空襲をうけた日は、一九四五年（昭和二十年）七月十七日で、午前一時頃に焼夷弾が投下されました。沼津の市街地の九割弱が焼失し、死者二百七十四人という犠牲が出たことを知りました。学芸員の方の説明を聞いて印象的だった言葉があります。アメリカ軍は、隊長から「ごみを捨ててこい。」という命令をうけたと聞きました。人の命をうばった焼夷弾を「ごみを捨てる」という命令で行ったことに僕は本当にしようげきを受けました。午前一時は就寝中なので、その時間はねぼけまなこだった大人や子どもが多く居たと思います。戦争というのは何も相手のことを考えず時を選ばず、人を傷つけ殺します。当時の沼津の人々は、

「まだ生きたい、まだ死にたくない、お父さんお母さん助けて」と、思ったに違いありません。今の僕の年齢では考えられません。戦争は怖さをなすものだから二度と起こしてはいけなと思います。

戦争史跡めぐりで一番印象的だった場所がありました。「御成橋の空襲痕」でした。僕は今まで何度も通ったことがありますが、知りませんでした。御成橋の橋の支柱に凸凹がありました。それは空襲によって創られた焼夷弾の投下を証明する痕跡です。戦後八十年の月日が経っているのに関わらず、今でもこのように残っていることに驚きました。実際に触れてみたら、鉄の支柱はすごく硬くて、簡単に凸凹ができないと実感しました。これが沼津の人々に危害を加えた跡だと思いました。

今回、僕は戦争史跡めぐりに参加して、戦争があつては、多くの人々

が亡くなり、受け継がれてきた命が一瞬にして無くなってしまうと思いました。とても悲しい事だと思います。僕はこれからも平和な世界にするためには、国々と二度と戦争をしないという条約を世界中で結ぶことが大切だと思います。

僕はこの体験をしよう一つ知ったことがあります。それは、「千人針」という縁起物です。千人針とは、出征兵士の無事を祈るために、千人の女性が一針ずつ、赤い糸で布きれに縫いだまを作って贈ったものです。僕はこの千人針を体験して、

「このように皆の思いがこめられたものを受け取ったらうれしい。でもこれほどの期待を背負って戦地に向かわなければならぬ苦しみもあつたのではないか。」

と思いました。大切な家族に会えなくなる戦争は二度と繰り返してはいけないと思います。

戦争と特攻と平和

愛鷹小学校 六年

熊谷 葉那

私は、戦争を体験したことがない。なので、戦時中にとどのようなことが起きていたのかはあまり知らない。

私は、戦争と平和についてもっと知るために、「あの花が咲く丘で、

君とまた出会えたら。」という本を読んだ。この本は、中二の百合が

七十年前の戦時中の日本に行き、特攻隊員の彰に恋をしていく物語だ。

私は、飛行機で相手の船などに体当たりをする隊員がいることは聞いたことがあったけれど、その名前が特攻隊ということは初めて知った。そして、この本で特攻の出しき命令が出たとき、ほとんどの特攻隊員や町の人が「うれしい。」「おめでとう。」と言っていた。これから死んでしまうのに、それを喜んでいることを私は、ありえないことだと思った。中には、周りの人たちにつられて、特攻隊に入ることになったけれど、大切な人がいるから「生きたい。」と言っている隊員もいた。私も、大切な家族がいるから、その隊員と同じように答えると思う。

特攻隊について、気になることがまだあったので、調べることにした。まず、「特攻」は「特別攻め」の略だということが分かった。このことから、私は他の攻めき方法とはちがっていた、と考えた。次に、どうして特攻隊ができたのかを調べた。そして、アメリカの猛攻を前に、日本軍が反げき的手段として始めたことを知った。さらに、終戦後も特攻が行われたことや、この作戦で約六千人の隊員が、亡くなっていることを知った。特攻作戦で、亡くなったのが約六千人と、私が思ったよりも多い人数で残念だった。このように思ったのは、自分から相手に体当たりをしていく隊員が六千人もいたからだ。

特攻隊について考えてみて、新しいことを知れたり、戦争や平和のことを改めて考えたりすることができた。今、やっていることが戦時中は当たり前でできなかつたことを思うと、平和を続けることは、ど

の時代でも守ることが必要、と心から感じた。

戦争の授業を受けて

大平小学校 六年

杉山結美

令和七年、八月十五日、日本は、終戦八十年をむかえた。終戦八十年という事で、新聞やテレビなどといったあらゆる報道メディアで報道され、戦争の恐ろしさ、切なさ、二度とくり返してはいけない事を未来につなげようとした。

私は、今まで「戦争」という言葉を何度も耳にしてきたが、深く考え知らずと思うきっかけに出会う事はなかった。だが、学校の社会で、日本国憲法を学んだ。日本国憲法は主に三つに分けられ、その一つに「平和主義」がある事を学び、日本は二度と戦争をしない、二度とぶり返さないという思いが他の国より強くある事を知った。また、学活では「アンネの日記」という動画を見て、日本以外の国でも、悲しく残酷な出来事が繰り返り広げられ、大切な命がむなしくも、ただ失われ、多くの人が心に傷を負っている事も知った。

だが、私は一つ疑問に思った事がある。それは、なぜほとんどの人が戦争を無くしたいと思ひ、国際的な組織も平和を目指して活動しているのに、未だに戦争は続き、同じ人間という立場にあるのに、むな

しくも傷つけ合い大切なものを多く失わなければいけないのか、という事だ。

そこで私は、本やニュースなどのあらゆる手段を使って調べてみた。すると、多くの事が分かった。主な戦争の原因は宗教や文化の異なり、資源や領土の国民の不満や欲望であった。でも、その不満や欲望は、その国同士で話し合い、協力し、不満や欲望が小さいうちに解決すれば戦争などという多くの人が傷つき、大切なものを多く失い、不幸をもたらす最悪的な事も、おこる事なくすむのではないか。

今もロシア、ウクライナ戦争、イスラエル、パレスチナ紛争などをしていて、この一分一秒を私はなにげなく過ごしているが、戦争をしている国の人々の一分一秒はいつ爆弾がふってくるか、いつ戦車が攻めてくるか分からないと思いがら過ごし、いつも死と隣り合わせで、生きた感覚がしない日常生活している。

そう考えると、絶対に戦争は二度としてはいけないし、戦争を行っている国には、一刻も早く戦争を終えて、友達や家族、大切な人と安心できて、幸せな日常を過ごせるような日が一日も早くもどってきてほしい。近い将来、この世界から「戦争」という人々を痛めつけ、一瞬にして幸せも何もかもをうばいとるものが無くなってほしい。世界中の人々が生まれ故郷、年れい、性別に関係なく自分らしさを認め合えて豊かでだれもかれもが幸せと思える世の中になってほしいとも思う。

命がうばわれていく

浮島小学校 四年

平山満月

みなさんは、戦争をどう思いますか？

わたしは、たくさん命がうばわれてだれもが悲しむものだと思います。ました。

わたしが戦争について知ったきっかけは、テレビのニュースを見たことです。テレビに出ていた人が戦争について話しているのを、聞きました。

その話では、一九四五年八月六日に広島に原爆が落とされて、三日後の八月九日に長崎にも原爆が落とされたというものでした。

死者の数を合わせると、二十一万人をこえています。原爆が落とされた所は、一面が火の海になり、家もえたり、近くにいた人は、ふきとんで物の下じきになったりしたそうです。もえてしまった人もいて、水をもとめて川に入って死んでしまったそうです。

そしてわたしたちが住んでいる静岡県にもばくだんがたくさん落とされました。

わたしはその事実を知って、心がいたみました。戦争で家族や友だちが死んでしまった人もたくさんいたと思います。

そして、今もウクライナとロシア、イスラエルとハマスなど世界の

あちこちで戦争がおこっています。

わたしはテレビのニュースを見て、死んでしまった人のことや食べ物がなく食べられない人もたくさんいるということを知りました。毎日のようにそのようなニュースが流れていて、わたしは見ていられないほど、心が痛みました。

わたしは思いました。戦争をすると、何もよいことなんておこりません。ただ家族や友だちが死んだり家もえたりして悲しむだけです。ただ命がうばわれてだれもが悲しんで泣いてしまうだけなのです。

わたしは、戦争がない世界で、家族や友だちと、けんかやあらそいなどおきない、平和で静かな日じょうにしたいです。

だから、ウクライナとロシア、イスラエルとハマスが戦争をやめて、みんながなかよくすごしてほしいです。

みなさんは、戦争をどう思いますか？

戦争と平和

香貫小学校 五年

福田 葵 心

終戦八十年が経ち、戦争を知らない人たちが多くなり、体験した話ができる人も少なくなっています。私も戦争はどんなことがあったのか全く知らないので、『火垂るの墓』を観てみました。

空からたくさんのお弾を落とされ、家を火事でなくしたり、大やけどで亡くなったたり、本当にこわくて、今では考えられないことが起きていました。

親を失い、おさない子どもだけで生きていかなければいけない。お兄ちゃんはおなかをすかせた妹にごはんを食べさせるために、人の畑の物を盗んだり、空しゅうでるすの家に入ってお金にかえられる物を盗んだりして生きているのを見て、悲しい気持ちになりました。ふつうの生活をしていたのに、戦争が起き、盗んだり、人をきずつけたり、生きていくためにどれだけ必死だったか知りました。お国のためにと、飛行機で相手の船につっこむ特攻隊も、きつとこわかっただろうし、絶対に死にたくないと思っていたと思います。

私が住んでいる沼津市も空しゅうにあつたそうです。アメリカ軍機は富士山を目標として日本に飛行してきました。沼津はその通り道で、軍施設や多くの工場がありました。米軍機約百二十機から九千発を超えるしょうい弾が落とされ、多くのぎせい者が出たそうです。

今を生きている私たちがいるのは、たくさんの方たちの努力、平和へのいのりの積み重ねがあつたからだと思います。

戦争のことを忘れてはいけないし、この先も私たちは戦争について考えて、次の世代にも伝えていかなければいけないと思います。

今でも世界中で戦争やテロが起き、不安な日々を送っている人たちがいます。どうしたら争いごとがなくなるのか、世界の人々が平和な生活を送れるのか考えていく必要があります。相手のことを考え、否定的にならず相手の意見も聞く姿勢などが、小さなことかもしれない

けれど、平和への道につながっているのかなと思います。

私はまだまだ戦争について知らないことが多いですが、この先も忘れてはいけないことなので、積極的に戦争について知っていかうと思います。そして、いつか世界中の人たちが笑顔で平和に生活できる日がくることをいっています。

平和と公正をすべての人に

香貫小学校 六年

中 神 紗 弥

私が平和作文を書いた理由は、SDGsを調べた時に、世界には今も昔もたくさん戦争が起きていることを知ったからです。

日本でも過去に戦争をしていた時代がありました。たくさんの方が命を落とし、罪のない子どもたちも大勢亡くなりました。日本だけでなく、世界でもたくさん戦争がありました。世界での戦争について調べていた時に私が一番衝撃を受けたのは、過去にドイツで起きたホロコーストについてです。ホロコーストとはナチスドイツが行ったユダヤ人迫害の事で、とても悲い話が残っています。私はこの話についてもっと知りたくて、「シンドラーのリスト」という映画やホロコーストに関する動画を観ました。なんの罪もない人たちがユダヤ人というだけで収容所に連れていかれて、かみの毛をそられ、服を持ち

物は全部取り上げられ、小さな子どもや高齢者はガス室で殺されてしまいます。働ける大人は少ない食料と不衛生な環境、凍えてしまうような寒さの中で強制労働をさせられて死んでしまいます。こんなひどいことが世界で起きていたなんて信じられず、とてもこわいと思いました。

今のドイツでは自分たちが起こしたひどい戦争について、学校の授業で教わるそうです。過去に自分たちの国が行った悪いことを二度とくり返さないために、かくすことなく子どもたちに教えているということを知って、すごいなと思いました。自分たちがやってしまった悪いことやまちがっていたことを素直に認めて反省するというのは、世界を平和にするのにとっても大切なことだと思います。

日本も第二次世界大戦で、他の国の人にひどいことをしたそうです。しかし、私は教科書で日本がしたひどいことを教わったことはなく、図書館で本を探してみても、広島や長崎の原爆などの被害を受けた話の本はたくさんあるけれど、日本がしたひどいことの話の本は数少なかったです。日本もドイツのように悪いことやまちがったことを子どもたちにもつと伝えてほしいと思いました。国がちがうと、私が当たり前だと思うことが当たり前ではなかったり、日本では考えられないようなことが普通に行われていたりします。でも、それを理解し合うのは大切なことだと思います。そして、まちがっていることに気づいたときは、まちがいを認めて直すこと、おたがいが対等な立場でいられることに感謝の気持ちを持つことが大切だと思います。世界で苦しんでいる人々を助けるためにはとても時間がかかるかもしれない

れど、日本や世界のニュースに耳をかたむけ積極的に知ること、私が調べた事を友達や先生に広めること、あきらめずに行動し続けていくことが大切なんだと思いました。

何も知らなかった私

門池小学校 四年

谷 口 潤

「まだ私はせんそうについて何も知らない。」

せんそうはぜったいにやってはいけないということだけは知っています。せんそうはぜったいにやってもいいということだけは知っていません。

私は夏休みの宿題のこの作文を書くためにえい画を見たり、本を読んだりしました。それが初めてせんそうを知る、きっかけだったのです。

せんそうは多くの人の命をうばってしまい、食べ物や着る物もなく、ばくだんにおびえるかなしくつらい生活を送ることは私にとって、すごくショックでした。当たり前前の生活ではありません。せんそうは、今の当たり前前をすべてうばう、ざんこくなものだとこのことを、私はとても悲しく思いました。

たとえば、食べ物だったら、今は、スーパーに行けば買えるし、れ

いぞう庫を開ければ食べ物があり、自由に食べられます。せんそうの時、食べられる物がなく、いつもおなが空いています。家族はいつもいっしょにいるのが当たり前ですが、いっしょにいられなくなったり死んでしまったりしました。学校は、当たり前前のように行って、友だちと会えます。それももちろん行けません。ねることは、なんの心配もなく、温かいふとんでぐっすりねむることができますが、ねている時に空しゅうけいほうが鳴るとすぐににげたり、かくれたりして、安心してねむることはできませんでした。

せんそうは今の当たり前前を全部うばうことが分かり、私はどうしてせんそうはおこったのか、なくならないのか、関係ない人までまきこむのか、今日本に外国がせめてきたら、日本はせんそうをするのか、などの今まで知らなかった、「知りたい！」があふれ出してきました。

私のお母さんは、お母さんのおじいちゃんからせんそうの話をお聞かせってもらったと聞きました。私には、せんそうを知っていて話をしてくれる、おばあちゃんやおじいちゃんはいません。だからせんそうはちがう国の物語のような気がしていました。でも、この作文で私がかかったこと、それは、私はせんそうについて学ばなければ、何も言えない、ということですが。

せんそうを、もっとよく知ってどうしてせんそうはおこるのか、せんそうのない世界にするには、平和とは何か、などを学び、次の世代に伝えていくことが、私たちには必要だということが、今分かりました。

約七十年前の原水ばくの被害を受けた 人から学ぶ原水ばくのおそろしさ

― 被害者から伝わる想い・動かされた心 ―

門池小学校 六年

松田京真

ビキニ事件、それは米国がキャッスル作戦の水ばく実験をマーシャル諸島で行った際に、サンゴ片の『死の灰』がふり、被害を受けた日本のマグロ漁船『第五福竜丸』の乗組員が命を落とした事件です。

この原水ばくのえいきょうで命を落とすこともあり、世界で『原水ばく禁止世界大会』が行われました。原水ばくは、放射線をふくむもので、強いものとなります。えいきょうとしては放射線によるはきみやおうとなどが起こる放射線障害・白内障・心臓病などの健康被害にも。さらに大気おせん、土じょうおせんなど環境へのえいきょうもねんされます。そんなビキニ事件のような原水ばく事件のもと原水ばく実験等は日本ではもちろん、世界で禁止するよう求める動きが広まりました。そして二度と原水ばくを起こさないように一九五五年九月に原水ばく禁止日本協議会が結成され、被害者がいもんしました。

そして結成された協議会は国際的な活動を行っています。具体的に『核兵器全面禁止アピール』署名を実施しています。全国的な活動も増えています。原ばく、原水ばく被害者救出、救助を行っています。

地域でも誰もが参加しやすい取り組みが行われています。地域での取り組みとしては、毎年『原水ばく禁止国民平和行進』が行われています。原ばくや原水ばくの禁止をうったえる人が一人でも増えるように、地域、県が行っている取り組みです。

核兵器はいらないとアピールしながら行進する人たちを見て、このような活動から平和な日本が実現することを、改めて痛感しました。みなさんもぜひ参加してみてください。

そして原ばくや原水ばくの原因はやはり、国同士の関係ですが、日本国憲法の三原則の一つである『国民主権』のとおり、国民が主権を持っています。僕も、もちろん身近なところから、言葉づかいを気をつけたり、犯罪を起こさないなど、地道なところからやってみたいと思います。

そして、僕の住んでいる静岡県に静岡県原水ばく被害者の会があります。現在、県原水ばく被害者の会のこもんを務めている川本さんの記事を読みました。川本さんは八才の時に広島に落とされた原ばくで父の貫一さんを失ったほか、ばく心地から二・三キロはなれた場所にした自身も左手などにやけどを負いました。そして川本さんはこのように発言しました。

「被がい体験を話すことができる人が減少しているし、昔ほど平和教育を行っていないように感じる。広島や長崎に行つて、被ばくの実情を学ぶことを続けて伝えようしてもらいたい。」

僕は、広島や長崎に行つたことがないけれども、機会があればたずねて、被害を受けた人に話を聞いてみたいです。僕も平和教育を大事

に思います。

みなさんにおすすめしたい場所があります。被害を受けた人の気持ちを共感したい人は、静岡平和資料センターにぜひ行ってみてください。静岡平和資料センターに行くと、『静岡の戦争と空しゅう』と企画コーナー展示があり、静岡・清水の空しゅうをメインテーマとした戦時資料・体験画・解説パネルを展示しています。そこで僕は同じ静岡県民の空しゅうを受けた人たちの、気持ちを共感したいです。

そしていつか自分たちの取り組みで、日本が生まれ変わる可能性があるかと思えば、僕は国会議員など、日本を引っ張っていくそんざいになりたいです。

ねこと人間

沢田小学校 四年

杉山 巴 菜

人はどうして

せんそうするの

何か理由があるんでしょ

人はねこより

おとつていて

ひどいものかも

しれないよ

人のせんそう

ねこに例えると

魚のとりあいくらいに

ちっぽけなことから

はじまるんだよ

でも

ねこはころし合わないけど

人は何百 何千 何万人もの

命をとってしまふ

なんにも悪くない人をころしてしまふ

たたかいに行つて旅立つ人

おなががすいて旅立つ人

こうげきされて旅立つ人

せんそうさえなければ

生きていた人もいたんだよ

本当の幸せは 何気ない日じよう

みんなが元気な やさしい日じょう

起きてはならないせんそうを

止めて なくして もう起きないように

いつか地球に 本当の

平和がきますように…

木ぼりのおき物

沢田小学校 四年

糸川 祐正

家におじいちゃんからもらった木ぼりのおき物があります。それが何なのか分からなかったので、おじいちゃんに聞きに行きました。するとおじいちゃんは、

「パパアニューギニアのおみやげだよ。」

と、写真を何枚か持ってきてよくに話し始めました。その白黒の写真には、お母さんにだっこされた赤ちゃんと軍服を着たお父さんが写っていました。その赤ちゃんこそおじいちゃんです。その写真の中の赤ちゃんをだっこしているのがひいばあちゃんです。写真の中のひいばあちゃんは笑っていません。軍服を着たひいじいちゃんは笑っています。きつとひいばあちゃんに心配させないように無理に笑顔を作っ

いたのだと思います。この写真をとった後、ひいじいちゃんはパパアニューギニアで戦死したそうです。ひいじいちゃんの最後は船の上でアメリカ軍のばくげきを受けて亡くなったとおじいちゃんは泣きながら話してくれました。

だから、おはかには、ひいじいちゃんの骨はありません。おはかの中には、戦争に行く前に切ったかみの毛とつめだけが入れられているそうです。

おじいちゃんは若いころ、亡くなった自分のお父さんのおもかげを探しにパパアニューギニアに行ったそうです。その時に日本からひのきで作ったいいひを持って行ったそうです。おじいちゃんはパパアニューギニアの真っ白なすなとサングを拾ってきて、日本のおはかに入れたそうです。その時におみやげとして買ってきたのが、この木ぼりの楽器のおき物ということを知りました。

その時戦っていたのがアメリカだと聞き、ぼくは信じられませんでした。なぜならばぼくはこの夏、沼津市の姉妹都市である、カラマズー市のホームステイを受け入れて、パメラさんというおばあさんといっしょに生活していたからです。アメリカ人のパメラさんとは、いっしょにカードゲームをしたり、おかし作りをしたりして、楽しい時間をすごしました。最後の夜は、沼津夏まつりの花火をいっしょに見て感動しました。お別れの日は泣きながらハグしました。パメラさんの乗ったバスが出発した時、ぼくは手を思いっ切りふりました。

そんなやさしい人がいる国と戦争をしていたなんて信じられません。どうやって戦争をやめることができたのでしょうか。戦争をやるため

に戦車やミサイルを打つのではなく、花火にしてくれればいいのにな
と思いました。

最後におじいちゃんは、

「絶対に戦争はするなよ。」

と泣きながら言っていました。ぼくはこの木ぼりの楽器のおき物を見
るたびに戦争のない世界にしたいと思うのです。

なくならないもの

原東小学校 六年

井 本 愛 羅

私の生きる世界には、一つ、なくならないものがあります。それは
戦争です。

一言で言って、私は戦争が嫌いです。戦争は、多くのぎせい者を出
します。

でも、戦争はいつ起こるか分かりません。いつ、どの国が、どの
国を攻撃するかわからないのです。でも、戦争を望む人はいないと私
は思います。ひとたび戦争になればたくさんのぎせい者を出すからで
す。

なのに世界のどこかですでに戦争は続いています。私はいつも、
なぜ戦争が起きるか疑問に思います。誰も望まないのに、なぜ戦争を

する必要があるのでしょうか。戦争が起これば、ただ悲しむ人が増え
るだけです。どこかの国の政治家が言うような「平和のための戦争」
など、私は考えられません。

私は、誰かが何も考えずに戦争を起こしているのだとしたら、絶対
に許しません。たくさんの死者を出して、たくさんのけが人を出して、
たくさんの人を悲しませるなんて、私は許しません。

とにかく私は戦争が嫌いです。もう二度と起こってほしくありません。
でも、少しの人達がそう思っていないと、世界は変わりません。世界中
の人が、戦争の恐ろしさを知るべきだと思います。そして、みんなで
うったえれば色々な国のリーダーに届くと思います。

そうやって、みんなが力を合わせることができれば、戦争のない、
平和な世界を作れると思います。

千体の人形

第一中学校 一年

鈴 木 伶 果

朝、目覚まし時計の音で目が覚める、何も考えずにベットを降りる、
当たり前のように朝食をとり、家族と話す、私はこのことが日常であ
り、幸せであり、平和だと思っています。

平和の対義語の一つといえば戦争、今日は原爆投下から八十年の「原